

フィナッツァーホーフの夢

—— ホーフマンスタール『アンドレーアス』における「解釈のためらい」——

戸 嶋 匠

ホーフマンスタール『アンドレーアス』草稿(1912-13年)のケルンテンの章で、アンドレーアスはフィナッツァー家に滞在中、二度夢をみる。本稿が主に扱うのは、最初の晩の夢と、この夢が覚めたのち、アンドレーアスの従僕のコットヘルフが、フィナッツァー家の番犬を殺し、女中を縛り、アンドレーアスの馬と旅費を盗んで逃亡していたことが判明する場面である。夢の内容は、以下の通りである。

まず彼は、問題の夢の前に、複数の乱雑な夢をみる。そこで「幼少期の生活の、あらゆる傾いだ／歪んだ、横向きの／奇妙な(訳注:以下の文脈を踏まえて意識すれば「クィアな」)状況を再び体験せねばならなかった(durch alle schiefen und queren Situationen seines Kindes- und Knabenlebens mußte er wieder hindurch)」⁽¹⁾というが、その「状況」は具体的には明かされない。そして問題の夢は彼の両親の暮らすウィーンが舞台で、彼はその夢の中でフィナッツァー家の娘ロマーナを不安いっばいに追いかけている。ロマーナはある家の中へ入ってゆく。なぜか左足が重く思うように進めない彼がようやくその家の中に入ると、子供のときの最初の教理伝道師の「恐れていた、小さな、醜く肥大した手」(64)が彼を掴み、黄昏時の裏階段で彼の聞きたくないことを喋っていた少年の嫌悪を催させる顔が、彼の頬に押しつけられる。それを押しのけると、ドアの前にかつて彼が馬車の轅(ながえ)で背骨を叩きのめした猫が、彼に蛇のようににじり寄ってくる。彼が跨ぐときに見せるその顔は猫のようでも犬のようでもあり、「おどましく混交した快楽と死の苦悶に満ちて」(ebd.)いる。部屋から叫び声上がるが、両親の衣類の詰まった箆笥と次から次に出てくる古着に妨げられて進めないところで目が覚める。すると現実でも女中の叫び声が屋敷中に響いている(65)。

精神分析の立場からいえば、夢の内容は重層決定されているので一義的な解釈に回収することはできないし、文学研究の立場からいっても、そのような解釈の固定化はテキストの読解を貧しくする。それでも一見、「意識化される自己の凶暴性」や「同性からの接触」といった言葉でまとめられ得るモチーフを丁寧に読み解けば、アンドレーアスの克服されていない幼少期の心的外傷と現在の心理の関係を整合的に説明できそうな夢である。だが本稿で明らかにするように、アンドレーアスの心的外傷が何であるか、そもそもそのような外傷があるのかを確定することは難しい。

夢の内容にもまして奇妙なのは、ベッドから起きて服を着ている間、「死刑囚」のような気分であった、「昨晚—自分は何か重大な罪を犯したのだ、そして今や全てが明るみになる、と彼には思われた」というアンドレーアスの描写である（65）。アンドレーアスはこの時点までゴットヘルフの犯行を知らないで、自分の従僕がフィナツァー家に損害を与えたことへの責任を感じているはずがない。あるいは、これも後述するが確かに従僕には怪しい素振りがあったので、テキストでは言明されていないものの、アンドレーアスは従僕の犯行を予感していたにもかかわらず犯行を止められなかったことへの過失を感じている、と解釈することができないわけではない。しかしこの解釈もどれほど「状況証拠」が揃っていようととも推測の域を出ない。仮にそうした予感を彼が抱いていたとしても、「死刑囚」のような気分というのは、彼自身の犯行ではないのだからあまりに大袈裟である。「重大な罪」が過去の動物虐待だとしても、「今や全てが明るみになる」はずがないし、現在の時間軸においてフィナツァー家に彼が与えた損害とは何の関わりもない。

本稿では個々のモチーフを検討したのち、精神分析的・超自然的解釈を試みるが、書かれた内容に忠実であればあるほど「解釈のためらい」に直面せざるを得ない。この夢の読解から、アンドレーアスの心理の道筋をある程度解きほぐすことはできても、確定的解釈を提示することはできないのだ。むしろこの不確かな読解の感触にこそこのテキストの豊かさがある、というのが本稿の結論である。

1. モチーフの検討 —同性からの接触、「死刑囚のような気分」—

性愛のみに注目して読むならば、この夢は極めて図式的な夢である。アンドレーアスの異性愛の達成は、同性からの接触のトラウマ（として夢の中で呼び起こされる記憶）によって妨げられ、彼の両親の衣服という「禁止」によって不可能にさせられる⁽²⁾。このうち「禁止」については、彼がこの夢をみる前に伏線がある。ロマーナとアンドレーアスが二人きりでいるとき、アンドレーアスは二度も視線を感じ、ロマーナといちゃつくことを止める。一度目は庭のベンチで並んで座っているときで、ロマーナの母親が二階の窓から見下ろしている（58）。二度目は、二階の祖母がお産をしたという生殖を連想させるベッドで、彼女に引き寄せられる形でキスをしていたときで、このときは気配を感じただけであったが、彼女とともに下に降りると彼女の父親が立っている（59）。

だが彼女の両親は娘が彼と親しくすることを止めようと思っているのではないことが、その晩に判明する。アンドレーアスは寝る前に、彼とロマーナについての彼女の両親の会話を盗み聞くと、そこで娘が何をしようと好きにさせておく、という母親の発言を耳にしている（61）。したがってアンドレーアスは、ロマーナとの異性愛が途中で「妨げられる」覚醒時の体験を夢内容に取り込んでいたとしても、異性愛が具体的な誰かによって「禁止される」体験は取り込んでいな

いはずである。もちろん、ロマーナとのベッドでの性行為は、彼女の両親には禁止されないにしても自分の両親には禁止されるであろうという思考が、顕在的であれ潜在的であれアンドレアスにあった、と推測することもできる。しかしこのような思考はテキストの中で明示されていない。すると夢内容から覚醒時の彼の心理を事後的に推理し再構成するほかないだろうか。いやその必要はない。焦点人物の夢であれ覚醒時の心理であれ、言明された「テキストの（心的）現実」であり、その「外部」は各読者の想像の中にしかないものであるから、この「テキストの現実」を言明の時点に即して分析するほかない。この前提を踏まえて問題の夢を読むならば、実際の両親の禁止を彼が予感しているというよりは、内在化された両親の規範に彼の自我が異性愛の達成を妨げられている、という読みがより妥当であろう。

ではこの夢で唐突に登場する同性からの接触というモチーフは、前後の文脈とどのように関わるのか。W. G. ゼーバルトは、「同性愛レイプと殺人」の「幻影」が同じ晩、「地平線上に現れていた」⁽³⁾ことを指摘している。彼は「ヴィンケルマン殺害を参照」(179, Zitiert nach Sebald)⁽⁴⁾という後年の作者の『アンドレアス』についてのメモとして全集に収録されているが、草稿の内容との具体的連関が見出せないメモに目を付け、この殺害の下手人の実在のアルカンジェリは「ゴットヘルフの兄弟である」と述べる⁽⁵⁾。その根拠としてゼーバルトは、「この逃走した殺人犯の男と森の中で一晩過ごすことから守ってくださった神様に感謝しなさい」(68, Zitiert nach S.)というフィナッツァー家の主人がアンドレアスにかけける言葉を引いている⁽⁶⁾。興味深い解釈だが、当該テキストとの関連性が薄いテキスト（著者のメモ）からの連想によってサブテキストを解釈するゼーバルトの立場は説得力に欠け、またテキスト的方法的表層的読解を目指す本稿のここでの立場と相違する。

あるいは、あえて夢の前後の文脈との連関の中でこの同性愛モチーフの意義を確定しなくてもよいかもしれない。M. ベルゲングリューンも教理伝道師と裏階段の子供の夢に同性愛的要素を見出している。「動物虐待の記憶」（ただし彼の引くのは、夢の猫のエピソードではなく、十二歳のときに靴の踵で子犬の背骨を踏みつぶしたという、フィナッツァー家滞在三日目にアンドレアスが回想するエピソード）が「彼には～であった／と思われた (ihm war)」や「それをしたかどうかは不確かだ (unsicher, ob ers gethan hatte)」(71, Zitiert nach Bergengruen) といった相対化の表現とともに語られる一方、同性愛的エピソードにはそういった言い回しが伴っていないことに注目するベルゲングリューンは、前者の観念は「現実の行為の記憶というよりは空想として」示されているとし、後者の観念は「空想であるだけでなく実際の記憶でもある」⁽⁷⁾とする。彼は、そのことからアンドレアスが「支配力／暴力 (Gewalt)」を被る者から行使する者への立場の転換を行っていることは明白であると言い、マゾヒズムとサディズムを同じ心的事象の二つの側面とするクラフト＝エービングの説を紹介しつつ、「空想の中での自我の役割の柔軟性は同時代の性科学の中心思想であった」⁽⁸⁾と述べる。

動物虐待のエピソードと二つの同性愛的エピソードが、現在時にアンドレーアスの想念に現れているということの「事実らしさ」（これはあくまで読者が文体から受ける印象であって、描かれた事象が「事実であること」と同じではない）では等価であっても、そのような出来事が過去にあったという「事実らしさ」の程度において等価でないということは首肯できる（しかし夢の猫のエピソードと回想の子犬のエピソードを取り替えてよいか、子犬が夢の中では猫に置き換えられていると解釈してよいか、疑問は残る）。確かに子犬のエピソードの、そのような出来事がテキスト外で実際にあったという「事実」性を担保するものはない。だが同性愛的エピソードもまた「実際の記憶」とは限らない。「事実らしさ」の程度が子犬のエピソードに比べて相対的に高くても、同性愛的エピソードが「実際の記憶」かどうかは、そもそもテキストからは確定できないことだ。

以上のことを踏まえると、テキストに基づかない推測⁽⁹⁾を排するならば、この夢の同性愛のモチーフは草稿全体の中で孤立しており、隠れた主題とは見なしがたい。そもそも異性愛や両親の規範といったモチーフと併置され、二つとも同性による接近であるためにこの接触のエピソードは同性愛と解釈される。だが別の文脈から読めばこのエピソードは違う様相を見せる。同性からの接近は、これ以前にゴットヘルフによって行われていた。彼は旅行用の馬の代金をせびるとき（48）、馬に乗りながら女の愛人について話しているとき二度（50, 51）、アンドレーアスの間近に立つが、状況から見てそこに同性愛の含みは読み取れない。このゴットヘルフのエピソードが置き換えられアンドレーアスの夢内容に反映されているとすれば（もちろんこれも推測の域を出るものではないが）、上記二つの先行研究の前提に反して、夢のエピソードを同性愛的接近のトラウマが想起されているものと読むことも難しくなる。ゴットヘルフへの生理的嫌悪感が事後的に過去のエピソードを創出した、もしくはエピソードの意味のアクセントを変えたとも読めるのである。夢の猫も、ゴットヘルフとの雇用交渉の場面で、ゴットヘルフが「湿った太い唇を猫のように舌なめずりした」（48）ことが加工された存在とも解釈することができる。記憶の子犬も、殺された番犬とこの夢の猫から創り出された存在であり、ゴットヘルフに対するアンドレーアスの加虐願望の現れであるともいえるのだ。

もう一つ意義を確定しがたいモチーフが「死刑囚のような気分」である。本文には「アンドレーアスはベッドから出て服を着た。しかしその際、死刑執行人のノックに目覚めさせられた、刑を宣告された者のような気分であった（aber dabei war ihm zumut wie einem Verurteilten, den das Pochen des Henkers geweckt hat）」（65）とある。I. ミュルダー＝バッハによれば、この箇所 *ihm war zumut[e] wie* という相対化表現ではこれが「外的な描写」か「内的な解釈」かどうかは識別できず、いわば執行人に起こされる死刑囚の状況が「表現されるべき感情の状態」とともに「捏造」されているという⁽¹⁰⁾。「状況」が「捏造」されたという印象のものであっても、上の引用文全体は言明された「テキストの現実」であるというのが本稿のここでの立場である。

だが、たとえアンドレーアスが「自分は死刑囚だ」と形容されるべき心理状態にあることが「事実らしい」としても、この形容を行う主体が異質物語世界的語り手である可能性も排除できないため、アンドレーアスが自己を「死刑囚」という言葉では意識していないことも考えられる。すると「死刑囚のような」という形容が彼の心理の内的必然性から生じた表現である必要はなく、物語の内的必然性からのみ生じた表現であってもよいことになる。それではその物語の内的必然性とは何かといえ、アンドレーアスをゴットヘルフの代わりに罰せられ、良心の呵責に苛まれるべきドッペルゲンガーに見立てるという超自然的解釈を採用しない限り説明できない。

「死刑囚」と「夢」で思い起こされるのは、ホーフマンスタールが『アンドレーアス』草稿を中断した翌年、1914年4月1日の日付で書いた手記である。その文章で彼は「秋」にミュンヘンでみた夢を詳細に記している。夢の中で彼はフランス革命の即席監獄におり、死刑を宣告されている。しかし彼はなぜか気分が良く、自由を感じている。妻が面会にやって来て、言葉と視線を交わすと、書記と共に去っていく。彼女を目で追うことができないと感じ、太陽の差し込む窓に彼が向き直るところで夢は終わる⁽¹¹⁾。

だがこれをもって作者の死刑宣告の強迫観念が作品に反映されていると考えるのは早計である。フィナッツァー家での一つ目の夢の場面が書かれたのは、草稿の欄外に書き込まれた日付(66)によると1913年7月21日前後であり、ホーフマンスタールが上の夢をみたのが1913年の秋だとすれば、草稿の夢の場面の執筆の方が先になる。それよりもここには内容の連関が見出せず、生産的な連想的読解は難しい。強いていえば、愛する人に手が届かないことが共通しているが、夢の中のホーフマンスタールにはアンドレーアスと違って、罪責感も焦燥感もない。この「死刑囚」のモチーフもまた、草稿では唐突な登場であるがゆえにいっそう暗示的な印象を受けるが、自然的解釈にとどまる限り意想外のコノテーションを読み取ることはできない。

2. 精神分析的解釈の試み ―フロイトと(ラカン・)ジジェク―

「テキストの現実」、「事実」、「事実らしさ」は区別されねばならず、テキストにないことを読み込んでではない。このような表層的読解の立場を墨守する限り、この場面を構成するモチーフが前後の文脈の中で浮遊していること、モチーフ単体ではその言外の意味を、確証をもって論じたいことが示された。そこでここからは分析のスタンスを変え、精神分析の夢の解釈との対比の中でアンドレーアスの心理を解きほぐす。

アンドレーアスがゴットヘルフの犯行を予感していた、あるいは気づいていた描写はないのだが、犯行の兆しを彼は何度も知覚している。ゴットヘルフが女中と「病気の馬を健康にし、健康な犬を病気にする」(58)という怪しい「飲み薬」を作っている場面に彼は出くわし、夜に誰かが犬に餌をやっていることを訝しみ(61)、その犬が奇妙な姿勢でひどい苦しみを耐えている様子を目撃する(62)。これだけの描写があれば、ゴットヘルフが犬に毒を盛っていると解釈しな

い方が不自然である。アンドレーアスも自分の従僕がフィナッツァー家に損害を与えたことを薄々感じているというのは、想像にかたくない。老いた犬の苦悶を見て、自分の父の死を想像して悲哀を感じる（63）不自然さも、目前の厄介な状況を直視したくないための防衛機制的働きとして説明できる。夢で登場する犬のようでもある猫は、番犬殺害に対する無意識的不安の反映と見なすことができるだろう。

第一夜の夢の特徴は、覚醒時に抱いた不安が反映されていること、また女中の叫びという知覚刺激が同時に夢内容に取り入れられていることである。この二つの特徴から連想されるのは、フロイトが『夢解釈』（1900年）の第七章「夢行程の心理学」の冒頭で取り上げる夢である。

ある父親が幾日も幾晩も子供の病床で看病していた。子供が死んだのち、彼は隣室に休みに入ったが、ドアは開けたままにしていた。子供の亡骸が棺台に安置されて蠟燭に囲まれている部屋が、自分の寝ている部屋から見えるように。一人の老人が番を任され、祈りの文句を呟きながら遺体の隣に座っていた。何時間か眠ったのち、父親は夢をみた。子供が彼のベッドのそばに立ち、父の腕を掴んで咎めるような口調でささやく。「お父さん、僕が焼けているのが見えないの？」父親は目を覚まし、遺体の部屋から漏れる明るい光に気がついてそちらへ急ぐ。見ると老齢の番は居眠りしていて、大事な亡骸の経帷子と片腕が、火のついたまま倒れかかってきた蠟燭で焼けていた。⁽¹²⁾

この夢は、フロイトの患者がある講演で聞いてきてフロイトに話したもののだが、その講演者はこう解釈したという。光が眠っている父の目にも入ってきて、蠟燭が火事を起こしているという、覚醒時に下したであろう推論を父が下した、父は老人が番の任に耐えられないという不安をもしかすると眠りの中に持ち込んだかもしれないと。フロイトはこの講演者の説明は正しいと述べる⁽¹³⁾。

その上でフロイト自身もこの夢について色々な解釈を行うが、最も独創的な解釈は「夢は願望充足である」という同書の基本テーゼに沿うものである。すぐに起きて隣室に向かわなければならない状況であることは夢の中でもわかっているのに、父親は「なぜすぐに目覚めないのか」にフロイトは注目し、それは亡きわが子と一瞬でも長く会うという「願望充足」のためだとする⁽¹⁴⁾。

アンドレーアスの夢はどうか。外で叫び声が上がっていてもすぐに目覚めないのは、ロマーナへの欲望のためであると解釈できる。しかし彼女を追う行為自体が願望充足なのではない。覚醒時の生活で満たされない彼の顕在的願望は、状況から見て彼女との性行為である。前述の通り、昼間のロマーナとのベッドでの行為は視線の気配によって中断されていたし、この晩、夢をみる前に彼はロマーナの寝室に行こうとするが、部屋を間違え、白髪の老女中がベッドに寝ていたので、思いを果たせず自分の部屋に戻る（62）。また彼の夢の中で彼女の「衣服は乱雑に引きちぎ

られていた」(64) ことに性的空想を見出すことは不可能ではない。ローマーナとの性行為もしくはその願望が変形された行為の最中、叫び声が聞こえるがすぐに目覚めないというような内容であったのなら、この夢はわかりやすい願望充足の夢である。しかし彼は脱衣という願望充足の行為の端緒にすら立てない。のみならず彼は両親の大量の衣服によって剥き出しの性から遠ざけられる。前述のようにこの夢の中だけで解釈すれば、内在化された両親の規範がここで勝利を収めている。別の文脈から読めば、ほかにも彼の願望充足を妨げている様々なファクターが考えられるだろう。

そのファクターが何であれ、彼は彼女の部屋に辿り着けず、また辿り着こうとしない。自分のベッドに戻るとき、思いを遂げることができなかったにもかかわらず、「これまでの人生で感じたことがないほど居心地がよく、快適であった」(62) という彼の描写を見落としてはならない。精神分析的に言えば、彼女の部屋を間違えるという「失錯行為」は、意識的意向(ローマーナとの性行為)に対する無意識的意向(性行為の忌避)の妨害によるものだ。「願望充足」説を忠実に守るならばこうもいえる。性行為が潜在的願望であるとしたら、性行為という愛の義務からの解放が潜在的願望である。そしてこの潜在的願望は充足される。この意味で不快を避け、快を求めるという快原理は、覚醒時においても夢の中でも守られている。

この「燃える亡きわが子の夢」には「別解」があるので、それも検討しておこう。スラヴォイ・ジジェクは、ジャック・ラカンの入門書の中で、ラカンのこの夢の解釈を補足する形で、次のように説明する。

不幸な父親を目覚めさせたのは外の現実からの闖入物ではなく、彼が夢の中で出会ったものの耐えがたく外傷的な性質だった。「夢をみる」というのが、〈現実界〉との遭遇を回避するために幻想に耽ることだとしたら、父親は文字通り夢をみつづけるために目を覚ましたのだ。シナリオは次のようになっている。煙が彼の眠りを妨げたとき、父親は睡眠を続けるために、すぐさまその妨害要素(煙、火)を組み入れた夢を作り上げた。しかし、彼が夢の中で遭遇したのは、現実よりもずっと強い、(息子の死に対する自分の責任感という)外傷だった。そこで彼は〈現実界〉から逃れるために、現実へと覚醒したのである。⁽¹⁵⁾

「現実界」はラカンの用語で、上の引用文からもわかるように、その中で我々が「夢をみつづける」「現実」とは別物である。言語によって構築された世界である「象徴界」に我々は普段住まうが、その「象徴界」の下に存在する「現実界」は、夢の中で一瞬見えてくるとされる。「現実界」との出会いは「享楽」(出会い損ない続けた者にとっての願望充足)であるが、同時に耐えがたい外傷的経験である⁽¹⁶⁾。この夢の場合は、(客観的事実かどうかは定かでないにせよ)息子の死の責任が自分にあるということが、父親が夢の中で直面し続けることのできなかった外傷

であるというのだ。

アンドレーアスの夢では、同性の二人からの不快な接触という受動的エピソードと、動物虐待という能動的エピソードが呼び起こされる。前者二つはいうまでもなく、後者の能動的エピソードも、自己の隠れた嗜虐性と直面させられるという意味では、外傷的経験であり得る。確かに彼は夢の中のこれらの存在と正面から対決することを回避しているが、その回避のために目覚めるのではない。ともかくも彼は同性の二人を押しつけ、猫を跨いでいる。彼を目覚めさせるのは、主観的には両親の大量の衣服という夢の表象であり、客観的には女中の叫び声という知覚刺激である。やはりこの夢のアクセントは、過去の外傷的経験の記憶ではなく、この衣服と、それが代理する、アンドレーアスの願望充足を妨げる何らかのファクターに置かれている。

フロイトと（ラカン・）ジジエクの夢解釈との対比の中で、アンドレーアスの夢が彼らの解釈に完全には回収できないことがわかったが、フロイトの用語を借りて彼の心理の道筋を解きほぐすことができた。すなわち、性行為という充足されるべき顕在的願望がアンドレーアスにはあるが、この願望よりも強力なファクターのために彼は夢の中でも願望充足を果たせない。ではそのファクターとは何か。「内在化された両親の規範」を措けば、一番単純な要因は、「服を着ていない姿の女を見たことがない、ましてや触れたことなど」（49 f.）という童貞の彼が、性的「能力（Vermögen）」に自信を持ってないことだろう。だが少なくとも彼の意識のレベルでは、財産（Vermögen）に自信を持ってないことの方が大きいようである。事件翌日の昼、零細貴族の子である彼は、自分の旅が家の年収をどれほど食いつぶしているか計算してくよくよ思い悩む（70）。その悩みが影響しているかはわからないが、直後の場面の昼食の席にロマーナが現れないのを見て、彼はもう二度と彼女に会えないように感じる（ebd.）。フィナツァー家ほどの富家の娘と結ばれれば、彼の経済問題は解消されそうだが、彼のうちの男性優位の規範が彼にそれを許さない。また草稿の最後の場面、家が貧窮のうちにあるニーナの手を、彼は自分から取り、ソファの彼女の上に身をかがめる。これはフィナツァー家のベッドでのロマーナとの場面と同じ体勢だが、今度の彼はいくらか積極的である。だが彼は突然、子供時代によくみた飢えの恐怖の夢を思い出し、自分が経済的に援助することで、この娘を彼女に言い寄る男たちから救い出すことができるか逡巡し、結局ニーナの手を離してしまう（96）。自分から身を引こうとする振舞いだけを見ると『薔薇の騎士』（初演1911年）の元帥夫人や『むずかしい男』（初演1921年）のハンス・カールを彷彿させるが、「大人の分別」から愛する人の幸福を自分の思いに優先させる彼らと、恋の作法どころか恋愛そのものを知らず、ただ逃げ惑うばかりのアンドレーアスは全く違う。

パターナルな規範を持つ彼は、女の貞操を「所有する」ことをただちにその女の生活に責任を負うことに結びつける（初日にしてすでに彼はロマーナとの結婚を考えている（63））。だが彼は、皮肉にもまさにこの保守的なジェンダー規範を盾に性愛から逃げ続ける。したがって、一日目の晩に彼が両親に心の中で誓った（63）ように結婚し子孫を残すという家に対する「道徳」も、性

愛の相手の運命に責任を持たない不道德も、彼は引き受けることができない。とにかく本草稿の一つの主題が、若い男の性的能力と経済力の複合的な悩みであるのは確かだ。そしてそれは、経済力が男性性の一つと見なされる社会に特有の悩みである。男が性愛に踏み出すことに悶々とする「童貞小説」⁽¹⁷⁾の系譜に連なる本草稿だが、男女問わず若年層の雇用・経済不安が拡大する一方、未だ性別役割分業意識の残る現代日本の、結婚や結婚を前提とした恋愛を面倒なだけでなく「ハイコスト」であると感じて、躊躇・忌避する若い男にもアンドレーアスは近いといえるかもしれない。

もっともこの小説で経済力を気にするのはアンドレーアスだけであり、ロマーナもニーナも彼を経済力で品定めして拒んだりもしない。娘の結婚相手としての資格が疑わしい彼とロマーナの間、障壁として立ち上がるはずの彼女の両親も、驚くほど彼に寛容である。彼らは彼の幼児的自己中心性を挫折させる他者としては現れない。彼は「失恋」を体験しないが、それは彼が恋愛を避けるからだけではなく、自他の欲望の差異についての認識（これこそが失恋の契機であるのだが）と彼が無縁であるからだ。フィナッツァー家到着の際、彼は「自分の魂が下僕たちの一人一人、主人と奥方を捉えているかのように感じる」(54) が、この「感じ」はロマーナも含めた他者に裏切られない。彼の男性性の悩みは、自分とは異なる欲望を持った他者からの拒絶を知らない、いわば心気症的な悩みである。

主題としての彼の悩みが自己完結的なものであるとすれば、この小説の読解は彼の心理分析に収斂するかに思われる。しかし、次節で見るように心理分析の手法では解きほぐしがたい箇所もある。

3. 超自然的解釈の試み ―共時性とドッペルゲンガー―

性行為という願望充足を妨げる要因としてほかに推定されるのは、ロマーナを求めることが彼女を傷つけるとアンドレーアスが思っていることである。滞在三日目の第二の夢の中のロマーナは、彼に「みんなの前で裸でベッドに縛りつけないで、盗んだ馬で行ってしまわないで」(73)と嘆願する。その前に「彼女が彼のことをゴットヘルフと思っているようにも、また彼のことをゴットヘルフとは思ってはいないようにも彼は感じた。彼にも自分が誰なのか、定かではなかった」(ebd.)とあるが、彼女が彼をゴットヘルフと同一視している（と夢の中の彼が思う）のでなければこのような嘆願の台詞はあり得ないので、少なくともアンドレーアスの主観の中では、彼はゴットヘルフと同一視されるべき存在なのである。抱きしめようとした彼に彼女が突然熊手で打ちかかることは、彼女の拒絶に対する予感の反映と見なせる。この夢の直前に「彼と死んだ犬の間には何かがあった、ただそれが何かを彼は知らないが。彼と、動物の死に責任のあるゴットヘルフの間にも何かがあった（Zwischen ihm und dem todtten Hund war was, er wußte nur nicht was, so auch zwischen ihm und Gotthelf, der schuld an dem Tod des Thieres war）」(72)

という言明があるが、これが第二の夢における同一性の認識の伏線となっている。

本稿が問題としたいのは、このアンドレーアスとゴットヘルフの同一性⁽¹⁸⁾が、アンドレーアスの主観的空想として自然的説明がなされるべきものなのか、それともユング心理学の「共時性」(「意味ある偶然の一致」⁽¹⁹⁾)で説明されるべき超自然的事象なのかという点である。基本的に自然的説明でカバーされるフィクションでも、複数の事象が「偶然の一致」のように起きることはあるが、それは物語の内的必然性に要求されてのことである。だが、因果関係が常識的に成立しない事象同士の連関が相対化されずに言明されることは、すでに自然的ではない。上の言明の動詞は war であり、「彼には～であった／と思われた (ihm war)」のような本草稿で多用される相対化表現は使われていない。したがって、この言明が語り手の承認する「客観的事実」なのか、アンドレーアスの主観的空想かどうかは躊躇されるのである。むしろこの箇所だけ相対化表現が使われていないので、この言明は超自然的な「客観的事実」であるという印象の方が強い。

『アンドレーアス』草稿には、このアンドレーアスとゴットヘルフの同一性の解釈を左右する奇妙な箇所がある。初日の夕食の場面である。

食卓の下手で、女中がくくっと笑いながら、「騎兵曹長さん」と言った。アンドレーアスは横柄に (herrisch) 尋ねた。「それはどの男のことだ？」その声は彼には大変異質なものに思われた、夢をみる者に声の主が夢の中から話しているかのようなようだった (Die Stimme schien ihm so fremd und ihm war wie einem Träumenden der aus dem Traum spricht)。遠くから従僕が彼を凝視した。蒼白で、髪はぼさぼさで、一怒りを噛み殺した様子で。(60)

「その声は (…) かのようだった」の箇所は原文では相対化表現が使われており、この箇所の超自然性 (アンドレーアスの声が別人のもの) をいうことは難しい。だが同箇所の内容は、アンドレーアスの応答が本来彼のものではないことが示唆されているかのようである。「騎兵曹長さん」とは、かつて帝国騎兵隊に所属していたと自称する (48) ゴットヘルフのことで間違いなく、女中が同じふうにゴットヘルフに呼びかけているのを厩でアンドレーアスも見かけている (58)。したがって「それはどの男のことだ？」という彼の問いかけは、純粋な疑問としてはおかしいのである。この聞き返しまでならば、アンドレーアスの非合理的思考特性が現れているという自然的説明はつくが、女中に何か重大な秘密を漏らされたかのようなゴットヘルフの反応 (元下士官という素性は、社会的に別段隠す必要のあるものとは思われない) があるので、この引用文全体をアンドレーアスの心の問題のみに還元することはできない。

なぜアンドレーアスは女中に聞き返すのか。フィナッツァー家の人々に、その家の女中と自分の従僕が親密になったことを悟られるのを憚ったのだろうか。たしかに女中は家の所有物であるから、厄介ごとが起きては困る。だが、フィナッツァー家の人が誰一人女中の発言を聞き咎めて

いないのに、わざわざ彼が聞き返して誤魔化す必要はない。

ところで、この場面のアンドレーアス、女中、ゴットヘルフの位置関係はどうなっているか。三つの可能性が考えられる。(一) 三人とも離れた位置にいる。(二) アンドレーアスと女中の方が近く、ゴットヘルフは二人から離れた位置にいる。(三) 客人であるアンドレーアスと使用人たちは席が別で、ゴットヘルフと女中の方が近い。(一)、(二) の場合、呼びかけの相手が遠くのゴットヘルフだとわからなかったので聞き返したのだと説明できるだろう。しかし「騎兵曹長さん」がゴットヘルフのことだとわかっている以上、この聞き返しはやはりおかしい。(三) の場合、女中の呼びかけの相手が彼女の近くのゴットヘルフであることは認識できるし、わざわざ遠くから女中に声をかければかえってフィナッツァー家の人が訝しむ恐れがある。

その上で奇妙な解釈が思い浮かぶ。女中の呼びかける相手がゴットヘルフではなく、アンドレーアスだとしたらどうか。もちろんそんなはずはないのだが、少なくとも、アンドレーアスが第三者に自分たちの同一性を見破られたと思い動揺している、と解釈することはできる。彼が「横柄 (herrisch)」聞き返さなくてはならないのは、元々不確かな彼の「主人 (Herr)」としてのペルソナ自認が揺さぶられるからである。しかしそのことで彼は、フィナッツァー家の下僕たちに「ひどく粗野で、横柄 (unflätig und herrisch)」(54) な態度を示すゴットヘルフと自己の同一性を図らずも露呈する。アンドレーアスが「横柄」で、ゴットヘルフが物を言えず我慢するもの、この二人の性格からいって反対のようだが、アンドレーアスは、普段意識化されないみずからの粗暴さという「影」(ユング心理学の用語で「人格の『否定的』側面」⁽²⁰⁾) を、その「影」が投げかけられているゴットヘルフから一瞬だけ主体に取り戻しているのである。

もちろんここまでは自然的・心理的解釈の範囲内である。重要なのは、二人の間で人格の入れ替わりが起きていることだ。二人のジキルとハイドの関係性は、このときのゴットヘルフの反応により、アンドレーアスの主観的空想の域を脱している。そのことは、この箇所を「心理小説」として読むことの限界を示すといってよい。また「騎兵曹長」というのも、ホーフマンスタールの読者には『騎兵物語』(1898年)のアントン・レルヒ騎兵曹長(みずからのドッベルゲンガーに遭遇する主人公)が思い起こされる。アンドレーアスの不安は、レルヒ騎兵曹長の死の結末の再現への不安なのかもしれない。

ゴットヘルフの番犬殺しをアンドレーアスが無意識裡に予感しており、その予感が夢に反映されている、というのが前節の精神分析的解釈の前提であった。実はこの前提はテキストの「状況証拠」による推測に過ぎない。アンドレーアスがゴットヘルフの犯罪を無意識にも予感していなかったとすれば、彼の一日目の夢に猫が現れることと、夢のロマーナの服が引きちぎられていることは、ゴットヘルフの犬殺しと女中虐待とシンクロしていることになる。その夢から覚めたときにアンドレーアスが「死刑囚」のような気分であることも、前述の通り、この時点で彼が従僕の犯罪を知らない以上、心理的必然性を持たない。そこで、「ハイド氏」ゴットヘルフの「ジキ

ル博士」的な良心的ドッベルゲンガーであるアンドレーアスであるからこそ、自分の片割れの重罪を超自然的に知り、重い罪悪感を覚えているという説明が浮上する。

しかし自然的解釈の立場からいえば、この「死刑囚」のような気分も、アンドレーアスの非合理的な思考特性によるものと反論できる。以上のように『アンドレーアス』草稿は、自然的解釈と超自然的解釈を引き起こすが、いずれもテキストに散らばる「状況証拠」に立脚した解釈である。そのためいずれの解釈も、同等の権利をもって相互の反証となっている。

4. 「解釈のためらい」―トドロフ『幻想文学論序説』―

アンドレーアスが自分は罪を犯していないにもかかわらず「死刑囚」のような気分であること、自分がロマーナを傷つけるかもしれないと無意識裡に思っていること、これはいわゆる加害恐怖であるが、そのことで連想される作品がある。芥川龍之介の短篇の遺稿『夢』（1927年）である。あらすじはこうだ。心身の疲労の激しい画家の「わたし」が、雇っているモデルの娘を絞め殺す夢をみる。夢から覚めると、時間になってもモデルが来ない。そのうち画家は自分の生活に空白の時間があることを考え「無気味」に感じ、もし彼女を絞殺したのが「夢の中でなかつたとしたら、……」と思う。そこで彼女の宿を訪ねるが、消息がわからない。その帰り道、このように訪ねたことも何ヶ月か何年前に「確かに」夢にみたと感じる⁽²¹⁾ところで終わる。

夢遊病の画家がモデルを殺しているのか、それとも彼女は何らかの自然的事情があって画家の許に來ないだけなのか、いずれにせよ自然的解釈の枠内にとどまるが、最後までわからない。だが最後の「確かに」夢にみた、というのが心理学的な既視感でなければ、画家は超自然的な予知夢をみていたことになる。この最後の描写を心理的・自然的に解釈するか、超自然的に解釈するかにより、『夢』という小説の性格は変わる。超自然的解釈を一貫させるならば、夢の絞殺とモデルの死に連関があるようにも思われてくる。

確かに解釈の分かれ目が『アンドレーアス』と『夢』では違う。前者ではアンドレーアスの夢とゴットヘルフの行為の共時性を認めるかにある一方、後者では画家の夢と現実の共時性を認めるかではなく、最後の言明をどう取るかにある。だがともかくも、奇妙な事象についての自然的解釈と超自然的解釈との間での決定不可能性が作品世界に奥行きをもたらししている点は、両作品に共通している。この決定不可能性あるいは解釈の「ためらい」を、「幻想文学」の構造的特性として評価したのが、ツヴェタン・トドロフの『幻想文学論序説』（1970年）である。

幻想はためらいの間しかつづかない。このためらいは読者と作中人物に共通のものであり、彼らは自分の知覚しているものが、世の常識で言う「現実」に属するものかどうか、決定しなければならないのである。物語の最後に至れば、作中人物のほうはともかくも、読者のほうはなんらかの決定を下すものであり、二つの解釈のいずれかを選択し、それによって幻想

から離脱する。現実の諸法則は無疵のまま、語られた現象もそれで解明できるというのが読者の結論であれば、そのとき作品はもう一つ別のジャンル、すなわち「怪奇」のジャンルに属しているのだ、と言っておこう。その反対に、問題の現象を説明できるような新しい自然法則を認めざるをえないというのが読者の結論であれば、そのときわれわれは「驚異」のジャンルに入り込むことになる。⁽²²⁾

反対にいえば、この「怪奇」と「驚異」という二つのジャンルの境界線上にこそ、「二つの解釈のいずれかを選択」できない「幻想」(文学)が成立するのである。そのような「幻想」文学として、トドロフはメリメの『イールのヴィーナス』やリラダンの『ヴェラ』を取り上げている⁽²³⁾。ところでトドロフは、読者と作中人物が作中の不可解な事象についての解釈の「ためらい」を共有するものと見なすが、「作中人物はともかくも」と彼自身が断るように、事象についての登場人物の省察が語られない場合もあるので、「読者」の「ためらい」のみを問題にすべきであろう。その「読者」とは、各自の読書経験や嗜好にしたがって恣意的に読む生身の読者ではない。トドロフによれば、それは「テキストに暗に包含されている『読者の機能』」⁽²⁴⁾であるという。

本稿がここまで試みてきたのは、まさにトドロフのいう意味での「幻想文学」として『アンドレーアス』草稿を読むことである。ところでこの試みの中で二つの発見があった。一つは、二つの解釈は、誰の目にも明らかな対立箇所を巡るものというより、読解のアクセントをどこに置くかの違いに過ぎないということである。本稿は可能な限りテキストを精読し、考え得る限りの読解の可能性を提示したが、そのことは、本稿と別の読解のアクセントがあり、またそこから別様の自然的・超自然的解釈の生まれる可能性を排除するものではない。

もう一つの発見は次のことである。精神分析学や分析心理学、ドッペルゲンガー概念という、テキスト外の知識を本稿は援用したが、これらはテキストによって必然的に要求される「世の常識」ではない。それでは、テキストに要求される読解のみを引き受けるべきタブラ・ラサの「読者」が「解釈のためらい」に直面するかといえ、本稿の第一節のように、「読者」は自然的解釈の枠内でモチーフの意義を見出せない状態にとどまる。

本稿では、自然的解釈と超自然的解釈の可能性を共に示す過程で、テキストの構造と表現の持つ「曖昧さ」を、豊かな多層性に読み替えることができた。だがテキストに包含された「機能としての読者」を演じることに成功しなかった。というより、そのような「読者」を想定することは、読解の創出性を考慮して憚られた。短い詩や散文であればあるいは普遍妥当な読解も可能かもしれないが、本草稿のような百頁にも満たない小説ですら、以上の二つの発見が示すように、実際の分析においては論者による対象箇所と分析方法の選択の恣意性を免れない。テキストの「曖昧さ」を、テキストが必ずしも要請しない知識に基づいた推測で埋めようとする試みは、「幻想」のようにはかないが、この「はかなさ」のうちにこそ解釈の生命がある。あるいはトド

ロフの指導教授ロラン・バルトの有名な綱領（「作者の死」）をもじってこういうべきであろうか。
創造的読解は、非個人的な無色の「読者」の死をもってあがなわれなければならない。

注

- (1) Hugo von Hofmannsthal: Sämtliche Werke XXX. Andreas. Der Herzog von Reichstadt. Philipp II. und Don Juan D'Austria. Aus dem Nachlass hrsg. von Manfred Pape. S. Fischer 1982. S. 64. 以下、同書からの引用は（ ）の中に頁数を記す。
- (2) 荒又氏のこの夢の解釈は、自己の成長を誇示したいアンドレーアスの、両親の規範に対する矛盾した態度に重点を置いている。「多様な暗示が畳み掛けられる密度の高い箇所であるが、ここで強調したいのは、主人公がローマへの敷居を越えるとき、一人前の大人として振る舞おうとするまさにその身振りそのものが、皮肉にも悪夢におびえた子供が両親の寝室へと逃げ込む図と重なっているという事実である」荒又雄介「犬の墓に何が埋められているのか：ホーフマンスタールの小説断片『アンドレーアス』に描かれる記憶像と成長物語の行方」オーストリア文学研究会『オーストリア文学』20巻（2004）、12頁。
- (3) W. G. Sebald: Die Beschreibung des Unglücks. Zur österreichischen Literatur. Von Stifter bis Handke. Fischer Taschenbuch 2012. S. 67.
- (4) このメモの全文は全集によると以下の通り。「時。ハインゼは同じ頃イタリアにいる。ちょうどルソーの『告白』が出版される。／ユステイ〔の伝記〕におけるヴィンケルマン殺害を参照。」(179)「ハインゼ」はおそらくイタリア滞在の経験がある作家 Johann Jakob Wilhelm Heinse (1746-1803) であろう。見ての通り、このメモが草稿のどの場面とどのような関係があるかは不明である。
- (5) Sebald, a.a.O., S. 67. ゼーバルトは明言していないが、同書の前後の文脈から見てアルカンジェリのヴィンケルマン殺害の動機に同性愛が関わっていることを前提としている。
- (6) Ebd.
- (7) Maximilian Bergengruen: Mystik der Nerven. Hugo von Hofmannsthals literarische Epistemologie des >Nicht-mehr-Ich<. Rombach 2010. S. 86 f.
- (8) Ebd., S. 90.
- (9) ヴァインツィールのホーフマンスタール伝は、ギムナジウム時代の友人シュテファン・グルスと詩人シュテファン・ゲオルゲがホーフマンスタールに激しい同性愛的感情を向けたが、いずれもホーフマンスタールの曖昧な態度のために拗らせたことを、当人たちの書いた手紙などに基づいて証明している。Ulrich Weinzierl: Hofmannsthal. Skizzen zu seinem Bild. Fischer Taschenbuch 2007. S. 105-119. ヴァインツィールはっていないが、『アンドレーアス』を「私小説」として読み、彼らをそれぞれ裏階段の少年と教理伝道師のモデルと空想したくなる。しかしこれも確証はない。
- (10) Inka Mülder-Bach: Genremischung und Gattungskonflikt. Zur episch-dramatischen Doppelphysiognomie von Hofmannsthals „Andreas“-Fragment. In: Hofmannsthal. Jahrbuch zur europäischen Moderne, Vol. 26. Rombach 2018. S. 167-186. Hier: S. 179.
- (11) Hugo von Hofmannsthal: Sämtliche Werke XXXVII. Aufzeichnungen. Text. Hrsg. von Rudolf Hirsch, Ellen Ritter. S. Fischer 2013. S. 623 f.
- (12) Sigmund Freud: Studienausgabe. Bd. II. Die Traumdeutung. Hrsg. von Alexander Mitscherlich, Angela Richards, James Strachey. S. Fischer 1972. S. 488. 引用文中の斜体字は原文でも斜体字。
- (13) Ebd.
- (14) Ebd., S. 489.
- (15) スラヴォイ・ジジェク『ラカンこう読み!』鈴木晶訳（紀伊國屋書店、2018年）、103頁。
- (16) 「現実界」については、村井翔「現実界はどこにあるかー『君の名は。』から『天気の子』へー」早稲田表象・

メディア論学会『表象・メディア研究』第10号（2020）1-15頁を参照。「燃える亡きわが子」の夢についてのフロイト、（本稿では直接扱わなかったが）ラカン、ジジェクの解釈についても本稿は同論文に示唆を受けた。

- (17) 「童貞小説」というジャンル名は、以下のアンソロジーのタイトルによる。『童貞小説集』小谷野敦編（筑摩書房、2007年）。
- (18) アウルンハンマーもゴットヘルフを「彼〔アンドレーアス〕自身のうちに存在する別の面の具現」とするが、その理由として上げるゴットヘルフの番犬殺しとアンドレーアスの夢での猫の登場を「時間的な同時発生」と呼ぶにとどまり、この偶然的事象の自然性・超自然性は問題にしていない。Achim Aurnhammer: Androgynie. Studien zu einem Motiv in der europäischen Literatur. Böhlau 1986. S. 248.
- (19) カール・グスタフ・ユング『エセンシャル・ユングーユングが語るユング心理学』アンソニー・ストー編、菅野信夫ほか訳（創元社、2002年）、311頁。ユングはこの「共時性の原理」は、「因果的には関連のないできごとに内的な連関が存在することを示唆」（同上）しているという。この概念ばかりはユング「心理学」の中でも明らかに超心理学的・オカルトとしかいえない概念である。
- (20) 同上、101頁。
- (21) 芥川龍之介『芥川龍之介全集第二十二巻』（岩波書店、1997年）、530-540頁。
- (22) ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』三好郁朗訳（東京創元社、1999年）、66頁。
- (23) 同上、120-122頁。ところでトドロフは、同所で「まるで…のように」のような比喩的表現が「ほとんどすべての幻想作家」に認められることを指摘して、「幻想がたえず修辭的文彩を利用しようとするのは、そこにおのれの起源を見出すからである」（同上、123頁）と述べる。本稿が指摘した『アンドレーアス』草稿における「彼には〜であった／と思われた」という相対化表現の多用もこのことと考え合わされる。
- (24) 同上、51頁。